

KSN 通信 VOL.143

こんにちは。いつも弊社をご利用いただき、誠にありがとうございます。

二十四節気では4月5日頃からの約15日間を「清明」といいます。清明は「清浄明潔」の略で、万物がけがれなく清らかで生き生きとし、明るい空気に満ちるという意味があります。花が咲き、鳥は歌い、空は青く澄み、爽やかな風が吹き、すべてのものが春の息吹を謳歌する季節です。早くこの暗い空気が払拭されて、明るい空気が満ちるよう切に祈ります。



■ 環境ニュース

■ デンプンとセルロースから高強度・高耐水性の海洋生分解性プラスチック

大阪大学の研究グループと日本食品化工株式会社が共同で、デンプンとセルロースを複合化した新たな海洋生分解性プラスチックを開発。このプラスチックシートは高い強度と耐水性を持ち、海水中で優れた生分解性を示すことを明らかにしました。これまで実用化された海洋生分解性プラスチックは、価格、生産量等の課題があるとされていましたが、コーン、イモ類に含まれる炭水化物の主成分であるデンプンと植物の主成分で繊維としても知られるセルロースは安価で身近に豊富に存在するバイオマス資源のため、従来の海洋生分解性プラスチックより安くできる見通しで、食品包装など向けに5年後をめどに実用化を目指すと発表されました。

■ 地球温暖化が進行、2019年の海洋の貯熱量過去最大に

地球温暖化により増加した熱エネルギーの約90%は海洋に取り込まれており、その熱エネルギー（海洋の貯熱量）の変動を把握することは、地球温暖化を監視する上で大変重要です。

気象庁では、地球温暖化の監視のため、海洋気象観測船やアルゴフロート等による観測を実施するとともに、国内外の観測データを活用して海洋の貯熱量の見積もりが行われていますが、2000年頃以前は深さ700m以上の観測データが限定的であり、700mより深い部分の貯熱量の変動を正確に把握できないという課題がありました。今回、新たな手法の導入により、海洋の貯熱量の大部分を把握可能な深さ2000mまで監視範囲を拡張した結果、以下のことがわかりました。

- [1] 深さ700mから2000mまでのより深い層でも貯熱量は増加
- [2] 1990年代半ば以降、貯熱量の増加が加速
- [3] 2019年時点の貯熱量は監視期間において過去最大

また、海洋貯熱量は1955年から2019年の間に約 43×10^{22} J（ジュール）増加し、平均水温は約 0.15°C 上昇しています。

発行元：株式会社関西再資源ネットワーク

〒592-8331

大阪府堺市西区築港新町4丁2番5

TEL：072-320-9001（代表）

FAX：072-320-9004